

アウグスチヌスと愛の秩序

服部英次郎

アウグスチヌスは愛についてどう考えたか、わたくしにも理解されるところかぎり、簡単にまとめて話したい。アウグスチヌスの愛の説について語ることは、かれの教え全体にわたることになるかと思う。それほどまでに、愛はアウグスチヌスの思想全体に中心的な地位を占め、それほどまでに、かれの神と人間についての説はすべて愛につながっている。

それで、アウグスチヌスの愛の説について語るためには、何か手がかりになるものを求めなければならない。わたくしは、これを意志に求めようと思う。さて、かれによると、意志は人間の魂の他の能力のように魂に属するのではない。「意志はすべてのもののうちにある。いな、すべてのものは意志以外の何ものでもない」(De civ. Dei. XIV, 6)といわれている。それでは、この意志を動かすもの、意志の力は何であるか。それは愛である。アウグスチヌスはこのことを説明するために、ギリシア以来の自然観に訴えている。すなわち、それによると、すべての物体はそれに定められた場所をもって、そこへその重みによって引かれて行く。たとえば、四元素のうち、火はその重みによって上方に、地はその重みによって下方に、また空気と水はこれらの中間に位置する。そしてカオスの状態にあったもろもろの元素は、その重みによって、それぞれそのあるべきところに集まり、いわば安定して、コスモスを形づくる。ところで、われわれ人間の意志にも、この重みにあたるものがある。それは愛である。「わたくしの重みはわたくしの愛である。それによって、わたくしはどこへでも運ばれて行く」(Conf. XIII, 9)といわれているとおりである。

愛は、このように、物体の重みにあたるもの、われわれ人間にとって、

いわばその本質に属するものである。愛は、善に向かってであろうと、悪に向かってであろうと、つねに何ものかに向かって行く。活動しない愛というのは自己矛盾である。愛はわれわれの存在の根本にあるものであるから、愛はわれわれの心に望ましいものとしてあらわれ、愛をもってなされるものは喜びをもってなされる。愛は存在そのものの喜びである。そして愛は、その直接の対象がないばあいにも、そのはたらきをやめないのであって、未知なもの、遠くにあるものに向かって行く。アウグスチヌス自身も、若いころカルタゴに遊学したときのことを、「わたくしはまだ愛していなかったが、愛することを愛していた」(Conf. III, 1)と語っている。それは、若者の幸福な不安ともいえよう。したがって、さきにもいったとおり、愛はわれわれの存在の根本にあるものであるかぎり、愛をわれわれから切り離すことはできない。われわれは、愛することがないなら、まったく生命のないもの、活動のないもの、厭わしいもの、忌わしいもの、みじめなものになる。したがって、われわれにとっての問題は、愛してよいかということではなく、何を愛するかということ、すなわち愛の正しい選択である。

さて、アウグスチヌスによると、真の意味で愛の対象であるのは、最高善である神以外にはない。したがって、神以外のすべてのものは、無条件に愛されるべきではなく、それらのものに対する愛は、それぞれの価値に応じて制限されなければならない。それゆえ、われわれは、すべてのものの真の価値を測って、その評価にわれわれの愛を合わせなければならない。そしてこの正しい評価と愛との一致によって、愛の秩序がうちたてられ、われわれは有徳なものとなる。アウグスチヌスもいっているように、「徳は、これを簡単に、正しく定義すれば、愛の秩序であり、愛の秩序を乱すことが悪徳である。」(De civ. Dei. XV, 22) したがって、道徳の問題は、どんな秩序に従って愛すべきかということに帰する。すなわち、アウグスチヌスによると、われわれは、まず愛すべきでないものを愛してはならず、

また、愛すべきものを愛さずにはならない。つぎに、小さな愛をもって愛すべきものを大きな愛をもって愛してはならず、また、大きな愛をもって愛すべきものを小さな愛をもって愛してはならない。最後に、差別して愛すべきものを無差別に愛してはならず、また、無差別に愛すべきものを差別して愛してはならない。そしてさきにもいったとおり、事物を正しく評価して、その愛を秩序づけるひとは、その生活が義であり、聖である。(De doct. Christ. I, 27)

さて、愛の対象のうち、もっとも低い段階にあるものは、食物、衣服、金銀などという、外的物質的な善である。それらもまた、善なる神によって造られたものであり、われわれの生活に、しかも神を求める生活に役立つものであるかぎり、それらを無条件に退けることは誤っている。われわれは、マニ教徒などの極端な禁欲主義の誤りにおちいってはならない。しかしそれらの善は、いっそう高い善への手段であるべきであって、それらの善を目的とすることがあってはならない。つぎに、愛の対象のうち、外的な善の上位にあるのは、われわれと等しく人間である同胞、すなわちいわゆる隣人である。この愛についても秩序があるのであって、われわれは、まず、親、兄弟というような身内のものから愛して、それからのちに他のものを愛さねばならぬのであり、それは、火がまず近いものに燃え移ってそれから他のものに及ぶのと同じように、いわば自然の定めるところである。

さて、われわれは、「隣人を自分と同じように愛せよ」という掟を与えられている。したがって、隣人に対する愛について考えるためには、「自分と同じように」といわれているわれわれ自身をどのように愛すべきかを考えてみなければならない。われわれ自身は、いうまでもなく、身体と魂から成立っている。身体は、魂よりも低い善ではあるが、やはり善である。われわれはみな、自分の身体を愛するのであって、それをにくむものはなく、それを養いはぐくむ。われわれは、手術によって身体をいためるばあ

いにも、苦い薬を飲むばあいにも、身体の健康のためにそうするのである。しかし、身体は善ではあるが、われわれのうち、最善のものではない。身体はけっして蔑むべきものではないが、しかし身体は魂のためのものであり、魂の善のために奉仕すべきものである。われわれ人間が「神の像に従って造られた」といわれるのは、身体のゆえにはなく、魂——とくにそのうち霊——のゆえである。それゆえ、われわれが自分を愛する愛において愛すべきは、われわれがそれによって神の像である魂である。

さて、われわれは、「隣人を自分と同じように愛せよ」といわれているとおり、平等の立場で愛さなければならない。われわれは、自分の愛するものをわれわれのところまで引き上げるにせよ、われわれが自分の愛するものところまで降って行くにせよ、つねに平等の立場に立たなければならない。われわれは、子どもを教えるとき、子どもの仲間にならなければならない。そうして、われわれが子どもの心に結びつけられているなら、われわれにとってまったく熟知のことがらもわれわれ自身に新しいものとしてあらわれてくる。このように愛によって、われわれと子どもの心とが一つになってこそ、教育は成立つのである。(De catech. rud. 17)

さて、隣人に対する愛はつねに平等の立場に立つべきものであるから、貧しい者に施しをするさいにも、われわれは、自分が施しをしてやる貧しい者がいることを望んではならない。飢えている者に食物を与えることはよいことであるが、食物を与えねばならぬような貧しい者がいないほうがどんなによいことだろう。愛の心髄はどこまでも善への意志、すなわち善意にあるのであって、慈善を施そうとする意志にあるのではない。

つぎに、愛は、平等の立場に立つものであるから、愛をもって報いられることを要求する。これが愛の交互性ないし相互性といわれるものである。愛する者は、自分の愛を何らかのしるしによって示して、その愛が愛をもって報いられることを求める。そして自分の愛する者から愛をもって応えられないなら、その愛はみたされない。それは、愛が二つの魂のいっしょ

に生きることであるからである。愛する者は、自分の愛する者を自分自身のように愛する。「愛は、二つのもの、すなわち愛する者と愛される者を結びつける、あるいは結びつけることを求める生にほかならない。」(De Trin. VIII, 10) したがって、隣人の愛においては、他者を愛することは自己を愛することであり、自己を愛することは他者を愛することである。アウグスチヌスは、若いころ自分の友を失った体験について語って、「世界はまったく暗黒となり、どこを見ても目に見えるのはただ死のみであった」(Conf. IV, 4) といっている。それほどまでに、愛は魂と魂とを結びつける強い力をもっている。

したがって、愛は人と人とを結びつけて、共同体、ないし社会、国家をつくる原理である。われわれが劇場などで経験するように、或る役者をひいきにする人びとは一つの寮囲気にとけこんで、ひいき同士が一体となる。かれらは、愛を共通にすることによってたがいに愛しあうのである。(De doctr. Christ. I, 29) これが、共同体をつくる愛の力であって、人間が一つの共同体に、あるいは一つの国に結合するのは、共通の善に対する愛によってである。したがって、或る国民がどういう国民であるかを知るためには、その国民が何を愛するかを知りさえすればよい。すなわち、国民は、その愛するものが善であれば善であり、その愛するものが悪であれば悪である。ところで、アウグスチヌスによると、当時のローマ国家はいうまでもなく、この地上の国々のうちで、真の正義を知って、それを愛したものはない。「正義がなくなれば、国家もまた強力な盗賊団以外の何ものでもない。」(De civ. Dei. IV, 4) このように考えて、アウグスチヌスは、「神国論」において二つの国、すなわち神の国と悪魔の国、あるいは天の国と地の国との対立を説いた。「二つの国をつくったのは、二つの愛である。すなわち、地の国をつくったのは、神をないがしろにしてまでも自己を愛する愛であり、天の国をつくったのは、自己をないがしろにしてまでも神を愛する愛である。」(De civ. Dei. XIV, 28)

さて、われわれの愛の対象のうち、最高のものはもちろん神である。この神に対する愛も、存在と善に対する愛であるかぎり、他の愛と共通のものをもっている。しかし、神以外のものがすべて有限な存在、有限な善であるのに反して、神のみは無限な存在、無限な善であるかぎり、神に対する愛と被造物に対する愛とのあいだには無限の隔たりがある。われわれは、神をどのように、またどこまで愛さねばならぬかと問われるなら、無条件に、また無限に愛さねばならぬと答えるほかはない。(Epist. CIX, 2) したがって、神に対しては、隣人に対するように、愛をもって報いられることを期待してはならない。しかし、それでは、さきに述べた愛の交互性ということには矛盾しないか。けっして矛盾しはしない。すなわち、神に対する愛においては、自己を忘れることがとりもなおさず自己を見出すことであり、自己を失うことがとりもなおさず自己を得ることである。神は絶対的な善であるから、神をもつことはすべてをもつことであって、そのほかに何ものをもつことを要しない。最高善である神のほかに何かをもとうとするものは、神への愛をそれだけ妨げられるのである。すなわち、魂は自分をまったく忘れてはじめて、最高善を自分のものとするのであり、そしてこのような神への自由な愛こそ、必ず報いられる唯一の愛である。

アウグスチヌスは、しばしば、「享受する」(frui)と「利用する」(uti)とを区別している。「享受する」というのは、或るものに、そのもの自体のゆえに、愛をもってよりすすむことであり、「利用する」というのは、われわれが愛するものを得るために、或るものを用いることである。したがって、人格は、人格であるかぎり、利用の対象とすることは許されないつまり、つねに目的として扱って、けっして手段として扱ってはならない。しかし、もっとも厳密な意味で享受の対象となるのは、ただ最高善である神のみである。(De doctr. Christ. I, 4)そしてこのような神への純粹な愛こそ、厳密な意味で「カリタス」とよばれるべきものである。さきに「隣人を自分と同じように愛せよ」という掟について考えて、その自分と

いうのは、自分の身体ではなく魂のことであるといったが、しかしその魂もまた、神を享受するために用いられるのでなければならない。したがって、「隣人を自分と同じように愛せよ」というのは、隣人の身体をかれの魂のためにのみ愛し、かれの魂を神のためにのみ愛せよということにほかならない。そしてそのかぎり、いわゆる隣人愛も「カリタス」の名に値するのである。アウグスチヌスのことばによると、「愛のはじまりは義のはじまりであり、愛の成長は義の成長であり、愛の大であることは義の大であることであり、愛の完成は義の完成である。」(De natura et gratia 84) したがって、絶対的な善である神への愛こそ、愛の完成であり、義の完成である。

それでは、このような神への愛を頂点とする、秩序づけられた愛は、どのようにしてわれわれのうちにおこるのであるか。それは、アウグスチヌスによると、「神の賜物である。」(Amare Deum, Dei donum est. Sermo CCXCVII, 1)「愛は、どこに、またいつ、絶対的完成の状態にあらうとも、ただわれわれの心のうちにのみあり、われわれに与えられる聖霊によってわれわれの心に注がれるのであって、われわれのうちにある自然的本性や意志の力によるのではない」(De natura et gratia 84) といわれている。

ここで、われわれの神に対する愛から転じて、神のわれわれに対する愛の考察に向かわなければならない。そして神のわれわれに対する愛を知ること、これまた神の賜物である、われわれの神に対する愛を知ることになるのである。

さて、神のわれわれに対する愛は、われわれの神に対する愛とは比較を絶するほど大である。創造主の愛は、被造物の愛のように何ものかを求める愛、エロスではなく、まったく純粋な愛、アガペである。この神の愛は、創造と贖いのうちに認められる。まず、神の世界創造は、不完全なものが完全なものを求めてではなく、また、何らかの必然性に迫られてでもなく、

まったく神のみちあふれた善性と自由意志による。そして神は、その創造した世界をたえず存続させ、摂理によって導く。つぎに、贖いのうちに認められる愛というのは、神がわれわれのためにその独り子をつかわして、死に至らせたことである。(Epist. CXXVII, 1) われわれの心に愛をおこさせるもっとも大きな誘いは、われわれが愛されているということを知ることである。どれほど誤った道に踏み迷ったものでも、どれほど心のかたくななものでも、自分が愛されているのを知ることによって、まったく消えたかのようにみえる愛の炎をふたたび燃やされるのである。われわれは、そのおかしき罪のゆえにまったく愛されるに値しないのに、神はその独り子をわれわれのためにささげるほどまでに、われわれを愛された。神の肉となったロゴスにおける愛は、永遠のロゴスを通じての天地の創造における愛におとらず大である。われわれを造った者がわれわれを造り直したのである。(Epist. CCXXXI, 6) したがって、神のわれわれに対する愛は、われわれがそれに応えることを要求するとともに、またそれを可能にする。すなわち、さきにいったとおり、われわれの神に対する愛も、神の賜物である。しかし、われわれはこの神の愛に応えて神との神祕的合一に至ることを考えてはならない。(De natura et gratia 37) さきに、神の愛において、自己を失うことが自己を得ることであるといったが、われわれは自己を失って神と一体になるのではなく、神のみ子の体の一部となるのである。アウグスチヌスは、「われわれは、ただキリスト者となっただけではなく、キリストともなったことを感謝しよう。主が頭で、われわれが肢体であるなら、この全人キリストは主とわれわれとであるから」(Tract. XXI, 8 in ev. Joh.) といっている。そして、かれのいうように、敬虔な聖徒たちは、キリストなる人とともに、一なるキリストとなる。そしてすべてのものがかれの恩寵によって天に昇るとき、天から地に降りた一なるキリスト自身も天に昇るのである。(De pecc. merit. et remiss. I,60) われわれは、すべてのものがわれわれとともに神を愛することを望んで、われわれ

がかれらに与え、あるいはかれらから受ける援助をすべてこの一つの目的に向けなければならない。(De doctr. Christ. I, 30)「神の愛は隣人の愛なしにはありえず、また、隣人の愛は神の愛なしにはありえない」(De fide et operib. 16)といわれ、「掟としては神の愛が先であるが、行為においては隣人の愛が先である」(Tract. XVII, 8 in ev. Joh.) ともいわれている。アウグスチヌスによると、キリスト者の霊的な結合体である教会は、われわれに与えられる聖霊を通じてわれわれの心に注がれる愛を実現するかぎりにおいてのみ、現実にキリストと一体である。このように考えてはじめて、「隣人を自分と同じように愛せよ」という掟が理解されるのであり、愛の平等性と相互性ということもいっそう深い意味を与えられるのである。さきにいったとおり、隣人愛が「カリタス」の名によってよばれるのもこの意味においてにほかならない。

最初に、自然的物体がその重みによってそれぞれに定められたところに集まって安定するとき、カオスからコスモスがつくられるといったが、われわれも、神から与えられた愛によって一なるキリストの肢体となるとき、はじめて真の平和が実現される。「告白」のはじめに、「あなたはわれわれをあなたに向けてつくられた。われわれの心はあなたのうちに安らうまでは安んずることがない」と語られているが、われわれがまずこの生において期待するのは、この地上の平和にほかならない。

——中世哲学会第14回大会(1965年11月21日、

南山大学において)公開講演——